

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇二三年（令和五年）四月三〇日
第一號（通卷第四三號）



八大山人「安晚帖」葡萄園（泉屋博古館蔵）

◆目録

- 卷頭言
- 二 再任の（あいさつ）
大木 康
- 四 全国漢文教育学会の活動
詹 滿江
- 六 半絃上陸式講義
濱田 麻矢
- 八 コロナ禍の台湾における大学と學術研究
金 培懿
- 十 国内学会消息（令和四年）
構成
- 十九 二〇二三―二四年度 各種委員会委員の
構成
- 二〇 各種委員会報告
論文審査委員会／将来計画特別委員会／研究推進・国
際交流委員会
- 二三 事務局より
- 二四 第75回大会開催のお知らせと研究発表の
募集

編集●京都大学文学研究科 宇佐美文理
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
メールアドレス：gakkaidayonkyoio@gmail.com
発行●日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

再任のごあいさつ

大木 康
理事長

2021～22年度に引き続き、2023～24年度の理事長に選任され、お引き受けすることになった。過去二年間を振り返って、本学会のためにどれだけの貢献ができたか、はなはだ心許ないものがあるが、コロナ禍の状況において、学会報刊行、大会開催等の活動を、理事、各種委員会委員、大会開催校のみなさまのお力によって遂行できたことは何よりであった。これからの二年間も、まずは本会の基本的な活動を着実にやっていくことにつとめたいと思う。会員のみなさまのご協力をお願いする次第である。

創立75年を迎えて

今年は、1949年に創立された本会の創立75年にあたる。今年の秋に刊行される『日本中国學會報』は第75集、大会は第75回大会である。今回は特別な記念行事を行う予定はないものの、ここで一つ考えておかなければならないのが、いずれやってくる創立100年である。本会は1998年に創立50年を迎えた。その時には、早稲田大学において記念大会が開催され、『日本中国學會五十年史』及

び『日本中国學會創立五十年記念論文集』が刊行されている。創立100年にあたっては、少なくとも『百年史』が編纂刊行されるであろう。いまから25年も先のことを考えてもしかたがないように思われるが、あるいは80年目くらいに、途中経過として『八十年史』をまとめておけば、『百年史』の編纂作業は容易になり、より一層の完璧を期せるであろう。この点についても、この二年の間に議論してみたいと思っている。

『五十年史』から

『百年史』のことを考えながら、『五十年史』のページをめくってみた。『五十年史』は、歴代役員名簿、大会開催校、『學會報』掲載論文分類目録などの資料編のほか、「日本中国学会五十年小史」（池田知久会員執筆）、「中国研究この五十年」と題して哲学（三浦國雄会員執筆）、文学（興膳宏会員執筆）、語学（佐藤進会員執筆）それぞれの研究回顧、そして、一つは長老の先生方による「草創期の日本中国学会」、もう一つは当時の中堅若手による「これからの中国研究」の二つの座談会が準備され、たいへん充実した内容である。『五十年史』刊行後に入会された会員のみなさまにも、ぜひどこかで手にとってごらんいただければと思う。

「日本中国学会五十年小史」では、五十年の歴史を「創立」「成長期」「安定期」「変動期」「持続期」、そして「新時代」に分けて整理している。さて、その後の日本中国学会は、いったいどのように形容したらよいだろうか。少なくともいま現在が「惰性期」にならないことを心したいと思う。

哲学、文学の研究回顧を見ていると、80年代から活発化し、定着しつつあった中国との学术交流を背景に、中国での研究動向に対する関心の深さを見てとることができるようである。日中国交回復が1972年のこと、昨2022年は日中国交回復50周年にあっていた。さまざまな国際情勢、またコロナ禍のために、本来あるべき50年の節目としての盛り上がりを欠いていたようであるが、1980年代に中国に留学し、その後もしばしば中国をおとずれてきたわたしたちの世代は、まさしく日中国交回復時代

にあり、そのかなりの部分を日中友好蜜月時代に生きてきた。そしてさらに、いわゆるグローバル化の進展により、地球はますます狭くなり、中国学も中国をはじめ、香港、台湾、韓国、東南アジア、そしてアメリカやヨーロッパなどとの交流なしには立ちゆかなくなった状況にあるといえるだろう。

創設期を語る座談会を見ると、データーの背後にさまざまな歴史、物語があったことがうかがわれる。『五十年史』後の四半世紀についても、データー背後の細節を、どこかで記録に留めておく必要があるであろう。

中堅若手の座談会では、研究対象の広がり、方法論、研究をめぐる社会的環境、歴史学との関係など、さまざまな問題が議論されており、いずれも現在につながる問題として多くの示唆に富む内容である。

『五十年史』が刊行されてから、早いもので四半世紀が過ぎようとしている。本会の活動は、この間も着実に続けられ、今日に至っているが、75年を迎え、まもなく80年を迎えようとするにあたり、改めて『五十年史』後の総括と新たな展望とが不可欠である。

「日本の中国学会」と「日本中国学の会」

自分の定年退職が目前に迫っていることもあって、またぞろ「隠遁」とか「隠逸」とかいうことに興味がわいて、その昔学生のころに読んだ富士正晴『中国の隠者』（岩波新書）を読み直してみた。最初に読んだ当時にはあまり感じなかったのだが、1973年に初版が出されたこの本が、純粋な学術論文とは異なるスタイルとはいえ、いかに日本の1970年前後の時代を反映したものであったか、痛いくらいに感じられた。

研究の成果は、もちろん客観的であるべきであり、『中国の隠者』も、いつ読んでもおもしろいのだが、同じく隠者を論ずるにしても、やはりこれは日本の1960年代から70年代のはじめ、いわゆる「政治の季節」にしか生まれえなかった著作だったのではないかと思う。そう考えると、やはり現在の日本の中国学は、現在の日本という環境があってはじめて成り立つものであり、それは中国における中国研究はもとより、アメリカ、フランス、ド

イツなどにおける中国研究においても同様であろう。

中国哲学、中国文学、そして中国史学も人文学に属し、いずれも文献に基づく学問であって、中国語文献の正確な読みがすべての出発点であることはいうまでもない。イギリス文学を学ぶ者がイギリスに留学し、フランス文学を学ぶ者がフランスに留学して修業研鑽を積むように、中国学を学ばんとするものが中国をはじめとする中国語圏に留学して勉強することは当然のことである。しかし、日本のフランス文学研究は日本的特色を持つであろうし、フランス文学を通して日本の文化のために貢献するものである。それは、日本における中国学も同様であろう。

「日本中国学会」は、「日本の中国学会」である。日本における中国学を代表する会として、世界の中国学との連携を欠かすことはできない。しかし、世界中どこへ行っても同じ、ただ一つだけののっぺりした「中国学」があるとも思えない。仮にあったとしても、本会が、その単なる日本分会であってよいとは思わない。「中国学の会」であると同時に、「日本中国学の会」という立ち位置も忘れてはならないであろう。「日本中国学」といっても、それはもちろん江戸時代までのいわゆる漢学ばかりを指すものではない。明治以後の中国学、そして第二次世界大戦後の中国学、そしていま現在のそれも含めての「日本中国学」である。海外の中国学界とつながることは重要であるが、やはり日本中国学の歴史と性格を踏まえ、それをわが身に背負いながら、広い世界に参入し、貢献していくのが、まっとうな道ではないかと思う。

昨年は、コロナ禍の下ではあったが、四年ぶりに大会の会場開催ができ、直接顔を合わせての研究交流の場を持つことができた。今年も、大阪大学において大会を準備中である。多くの会員のみなさまが大阪に会することを楽しみにしている。

全国漢文教育学会の活動

詹 満江
全国漢文教育学会会長

全国漢文教育学会の機関誌『新しい漢文教育』創刊号の編集後記によれば、昭和30年(1955)11月、大阪大学にて発足した大学漢文教育研究会が本学会の前身です。そして、それから29年後、昭和59年(1984)

10月に大東文化大学にて学会の名称等を変更することが決まりました。本学会は、前身の大学漢文教育研究会発足から数えると、すでに68年を経過したことになります。今回は、改組後の本学会の変遷をたどりつつ、最近の活動も紹介したいと思います。

まず、大学漢文教育研究会から全国漢文教育学会へと学会の名称が変更されたことに伴い、会員の構成が拡充され、大学教員だけでなく(小)中学・高校の教員も会員となりました。これは本学会の大きな特色といえると思います。大学においては引き続き国語教員養成における漢文教育力強化を進め、同時に中学・高校の国語教員の漢文教育力充実を図ることになりました。そのため、改組当初から漢文教育講座を実施しています。その第1回は、昭和60年(1985)7月22日から26日まで湯島聖堂にて1日1講座計5講座でした。この試みは現在も漢文教育研修会と称して継

続していて、昨年を例にとると、令和4年8月8日から10日まで、やはり湯島聖堂にて1日2講座計6講座が実施されました。国語教員が夏休み期間を利用してこの講座を受講することで、漢文教育力をブラッシュアップできることを目標としています。

本学会のもう一つの特色は、中学あるいは高校において、公開研究授業を実施している点です。昭和63年(1988)10月8日大正大学にて開催された第4回大会の前日7日、淑徳高校にて実施された公開研究授業が本学会最初のものでした。漢文の授業の現場でどのような問題があるのか、こうした実践的な場を設けることで明らかになる具体的な課題を検討し、国語教員の漢文教育力向上に役立てようとする試みです。こうした授業を実現するには各学校それぞれの事情もあり、必要な授業時間数確保の妨げにならない等、クリアしなければならない条件がありますが、本学会においては、会員の大きな協力を得て、いままで実施してきました。

そして、平成元年(1989)、ついに大会を春学期中に実施することになりました。それまでは毎年10月に開かれる日本中国学会大会の前日から大会を開いていたので、どうしても週日を使わざるを得ず、多くの会員が参加することはできませんでした。元号が変わったその年の6月3日土曜日午前中、公開研究授業が巣鴨高校の体育館で実施されました。現在の公開研究授業は中学あるいは高校の教員が教壇に立ちますが、このときは大学教員の河内利治氏(頼山陽の「送母路上短歌」)や水沢利忠氏(『史記』「荊軻列伝」)が授業をしました。4日の日曜日は昭和女子大学にてシンポジウムや講演及び研究発表が行われました。特筆すべきは井上靖氏の「小説孔子を書き終えて」と題する講演で、大抵は研究者による講演がほとんどという中であって、小説家による講演は大変珍しいといえるでしょう。

以上、漢文教育研修会と公開研究授業の他に、本学会の特色として、常任理事・幹事の研修会と会員を率いての中国への旅行が挙げられます。昭和62年(1987)1月31日、2月1日に箱根高原ホテルにて実施されたのを皮切りに、常任理事・幹事の研修会は毎年実施されましたが、最近は疫禍のせいもあって、オンライン開催となりました。この研

修会以外でも、ほぼ毎月、役員の会議が開かれています。

会員を率いての中国への旅行については、本学会企画として最初に実施されたのは、昭和63年（1988）3月27日から4月3日にかけての「黄河に栄えた中国文明の旅（北京・洛陽・西安・上海8日間）」でした。以来、疫禍前までほぼ毎年企画されてきましたが、ここ数年は、令和元年（2019）8月21日から27日にかけての「山東省 文化と歴史の旅」を最後に実施されていません。かつては石川忠久前会長を団長として、「陶淵明ゆかりの地を訪ねて」（平成9年7月25日～8月2日）と題して好評を博していましたが…。

なお、本学会の機関誌は第26号より『新しい漢字漢文教育』と名称を変えています。平成8年（1996）11月に日本で開催された第3回国際漢字会議において、韓国・中国・日本・台湾などの常用漢字の共通化について議論されたことが背景にあるようです。

それでは、本学会のおおまかな歩みについてはこのくらいにして、最近の活動について紹介いたしましょう。例えば、平成30年（2018）には、6月16日、17日に大妻女子大学にて第34回大会が開かれました。16日午前中には大妻女子大学附属高校にて公開研究授業が行われ、その後、場所を移して研究協議の場が設けられました。授業の教材は「古典B」の『史記』『鴻門の会』、教壇に立ったのは服部真由美氏です。翌日は大学に場所を移し、午前中、二つの会場に分かれて、小中高の部と大学の部それぞれ3名の研究発表が行われました。その発表者とテーマは以下のとおりです。

小中高の部

静岡県立浜松湖南高校教諭 若井典世

「鬼の哭く声——杜甫「兵車行」より考える——」

福島県立安積黎明高校教諭 小林健一

「漢文教育における参加型授業の在り方」

東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭 西村 諭

「社会とのつながりを意識した漢文授業の実践」

大学の部

慶應義塾大学文学部教授 合山林太郎

「戦前迄の日本漢詩についての教養と今日の国語教育——江戸・明治期の漢詩詞葉集から考える——」

千葉大学大学院社会科学研究院教授 榊原健一

「原始儒教・孔子儒教・朱子学——公理論的アプローチ」

山口大学教育学部准教授 南部英彦「劉向の災異説の一面」

従来、このように小中高の部と大学の部に分け、それぞれの会場で並行して計6名の研究発表が行われていましたが、疫禍後はオンライン開催となり、会場を複数設けることはできていません。パンデミック以前と以後では隔世の感があります。

午後、文部科学省初等中等教育局視学官の大滝一登氏が「高等学校新学習指導要領と我が国の言語文化」と題して講演し、その後、「高等学校国語科における古典教育の在り方」と題するシンポジウムが開催されました。登壇者は、有木大輔氏、渡辺恭子氏、船橋希予氏の3名、司会は誦口明氏でした。文科省の方の講演や中学・高校の国語教員によるシンポジウムは、本学会の特色をよく表しているといえるでしょう。

最後に、本学会が直面している課題についても触れておきましょう。ここ数年、教育の現場は疫禍のために強制的に電子化されました。慣れないweb会議システムを使っての授業に戸惑わなかった教員は少なかったのではないのでしょうか。そのようなときに本学会は何もできませんでした。ホームページの更新も滞っています。今後、学会の運営にもPCのスキルはますます必要になっていくことでしょう。教育現場のデジタル化も進んでいくと予想されます。こうした現状に迅速に対応していくために、本学会はデジタルツールに明るい役員を増やしていく必要があります。また、会誌のバックナンバーをインターネット公開していくことも本学会の使命でしょう。いままでの研究成果を教育現場で役立ててほしいと思います。そのためには閲覧しやすくなくてはなりません。

課題は少なくありませんが、地道に一つ一つ解決していくしかありません。昔、今は亡き石川忠久前会長が本学会を旗揚げしたとき、やはり今は亡き安居香山氏が土曜談話会の誼みで本学会のために寄贈して下さった学会旗がいまも大会会場をリレーされて、受け継がれています。まるで次世代の会員たちへのエールのようです。道は険しくても背中を押されて頑張っていきたいと思います。

半舷上陸式講義

濱田 麻矢
神戸大学

断続的に性別表象について講義をしている。十年以上も前、「民国以降の女学生」に研究の焦点を定めてからのことだ。論文執筆となると、立てた目標が遠大すぎて息切れしたあげくお蔵入りになってしま

うことがよくあるが、授業のほうは何かあろうと毎週90分を組み立てなければならないので、学期の終わりにとはとにかくなんらかの講義資料がPCに保存されることになる。勤務校では二月中旬に次年度一年分のシラバスを提出するので、前後期合わせて30回分の骨組はあらかじめ決まっているはずなのだが、実際の講義を終えて一年分の資料を見返すと、いつも前年度の自分が敷いたレールから実際の講義がはみ出していることに気づく。

最近では、自分の仕事量の限界を見越して、過去の自分が作りためたパワーポイントの中身を半分ほど入れ替えるという「半舷上陸式」とをとっている。馴染みのある「いつもの話」と当該年度オリジナルとなる「目新しい話」を混ぜてPCに仕込んでおき、自分内萌芽研究のあやふやな（でも新鮮な）アイデアを、何度も人前で話したのでそこそこ自信がある（しかしちょっと飽きた）話題でくるん

で講義するのが基本になる。授業の後LMS(インターネットを使った双方向の学習管理システム)に書き込まれた学生からのコメントを読み、さらに翌週の授業でかなりの時間をとってレスポンスする。同じようなテーマの話でも、受講学生の顔ぶれによってコメントの色ががらりと変わるところが面白い。このようにLMSを利用した間接的な討論は、受講生も楽しんでくれているようだ。

2022年度は「民国だめんず列伝」というテーマをたて、自由恋愛／結婚という風潮が崇高な精神的営為として理想化された一方、現実には継続的で安定した一夫一婦関係を構築するのがいかに困難だったか、康有為から胡蘭成までを組上に上げて話した。

講義テーマは毎年変えるが、結局同じような話題を力こぶして語っている、という自覚はある。わたしが話したいと思う内容の底にはいつも性別という問題がどっしり横たわっているので、畢竟マンネリズムからは逃げられないのかもしれない。

しかしながら、わたしの講義がマンネリズムであるとしても、世の中も、学生の態度もずいぶん変わってきたと思う。四半世紀近く前、わたしが学生と教員の中間のような立場にいたころ、「近現代の女性文学に興味があります」「張愛玲の研究をしています」と勢い込んで自己紹介した際に、曖昧に微笑まれることが一度ならずあった。前のめりに（ドヤ顔で？）話す学生に鼻白んでしまった、という面もあるのだろうが、それだけでは片付けられない居心地の悪さを感じていたのも確かである。恋愛、結婚、家庭といった「小さな物語」をためらいなく描いた作家を選んだことに後ろめたさを感じたこともあった。

例えば科研の申請などで自分の研究の価値をアピールする際、その主題がユニークであること、他に前例のないこと、つまり自分のやっていることがいかにニッチでマイナーであるかを強調することがままある。もしかしたら、人文系の研究者には、多かれ少なかれ自分の研究対象が正当に評価されていないというルサンチマンがあるのかもしれない。とにかく、90年代中頃に複数の場所で「あなたのやろうとしていることは本当の・まっとうな・きちんとした・文学研究ではない」と言われているように感じた

のは確かだ。そしてそう感じる事、あるいはその違和感を口にだすこと自体、自意識過剰、被害者意識過剰なのではないかという不安もあった。

もやもやしたまま沈殿していき、やがて忘れてしまったその違和感を、イギリスのジャーナリスト、Mary Ann Sieghart の *The Authority Gap: Why women are still taken less seriously than men, and what we can do about it* (Transworld, 2021) を読んで鮮やかに思い出した。ジークハルトの調査によれば、全英で売上が一位から十位の女性作家（ジェイン・オースティンやマーガレット・アトウッドからハーレクインロマンスまで）の読者のうち、男性は19%で女性が81%という不均衡があるという。それに対して、売上十位までの男性作家（チャールズ・ディケンズからスティーブン・キングまで）の読者については55パーセントが男性で、45パーセントは女性だというのだ。ジークハルトはさらに、これらの女性作家のうち、男性読者率が最も高いのはスリラー小説家のL. J. Rossであると指摘し、「名前がイニシャル表記なので、作者を女性と意識していない読者が多いのだろう」と述べている。つまり、男性作家の読者は男女ともにいるのに比べて、女性作家の本を選ぶのは有意に女性が多いということなのだ。これは考えすぎだろうか。中国文学についてはどうだろう。本を選ぶ時、読者にとって作者の性別は関係ない、と言い切れるだろうか。

学部生だったころ、読書会で楊絳が取り上げられたことがあった。インターネットがなかった時代、散文に登場する『小婦人』が『若草物語』のことだと突き止めるのも一苦労だったのだが、「なるほど、だから洗濯バサミ（塩漬けライムだったかも）なんですねえ」と呟いた時、前に座っていた先生が妙な顔をされたのに気づいた。『若草物語』のタイトルは知っていても読まれたことはなかったのだ。思わず脱線してその場で聞いてみたところ、年齢にかかわらず男性は『若草物語』も『あしながおじさん』も『小公女』も読んでいないことがわかった。いっぽうで、私を含めた女性の参加者は、『宝島』も『十五少年漂流記』も『海底二万里』も読んでいた。これは、女性の書き手にとっても男性の読み手にとっても大変もったいないこと

ではないだろうか。そしてこうした状況が「権威の差」を生み、アトウッドのように高い評価を受けている作家も「その読者のうち男性は21パーセントにしかすぎない」（ジークハルト）という事態を招いているのではないだろうか。

四半世紀前に私に向けられた曖昧な微笑みと、その微笑みに私が感じた後ろめたさもまた、長い因襲によって生まれた「権威の差」だったのではないかと今になって思う。その差が、少しずつでも埋まっていると実感するのは、こうした話題について学会なり授業なりで話したとき、うっすらとした曖昧な笑いではなく、真剣な眼差しで迎えられるようになったことだ。授業の中で、時折ジークハルトの調査について、あるいはベクデル・テスト（フィクション中に最低でも二人の女性が登場するか、女性同士の会話はあるか、その会話の中で男性に関する話題以外が出てくるか）について紹介するのだが、「考えすぎだと思う」「違和感あり」というような以前よく聞かれた感想にかわって、「どうして“少年漫画”を描く女性漫画家の多くが男性の名前で描いているのかわかった」「書店で書籍を選ぶ時、確かに男性作者のほうが女性の作者より“普遍的な作品”を描いているように感じてしまう」など、自分の身に引き付けた考察が増えてきたという手応えを感じている。

もちろん、自分の中にあるバイアスを学生に指摘されることもある。「女性作家ならではの視点」と言ったときなど、「それも一種のステレオタイプではないですか」と虚を衝かれ、その次の授業で「“女性作家ならではの”と言われてきたとき、私たちは何を連想するのか」について考えることになった。半舷上陸式の授業は、講義の内容だけでなく教員自身をアップデートする機会にもなる。

そのほか、五、六年ほど前から学生を性別によらずすべて「さん」づけで呼ぶようになった。慣れるのに多少時間がかかったが、これも「性別で呼び方を変えられるのが苦痛」という学生の声があったからだ。

2023年度は「秘密の閨密」というタイトルでシスターフッドについて論じる予定である。これもまた女学生講義からの半舷上陸になるが、学生からどんな閨密観が聞けるか今から楽しみにしている。

コロナ禍の台湾における 大学と学術研究

金

台湾師範大学

培懿

コロナが蔓延し始めてすでに3年以上になる。当初、台湾政府の行った出入国制限や感染予防対策が功を奏し、2020年から2021年4月中旬に至るまでの間、台湾は「一時的小康」状態にあり、台湾

全土の学校が対面授業を行っていた。また教育効果を考慮して、教員はマスクなしで授業を行うことも可能な状況であった。世界中がコロナで大きな打撃を受けている中、台湾ではこれまで通り教室で語らい、学ぶことができた。当時は大学内部の会議もほとんど対面式で行われ、あたかも台湾だけコロナ禍とは無縁なようであった。しかし、このような状況も、2021年5月以降一変する。ワクチンの不足が追い打ちを掛け、感染者が爆発的に増加していった。台湾全土の大学がキャンパスを封鎖し、キャンパスへの出入りには検温と身分証の提示が求められることになった。対面での授業も不可能となり、次第にオンライン授業へと移行していった。

感染予防対策のため、最も早くオンライン授業を採択したのは、「台湾大学聯盟」に属する台湾大学、台湾師範大学、台湾科技大学の3校で、その後、他の大学もオン

ライン授業に切り替わることとなった。5月に入り、学期もすでに半ばを過ぎた段階で、突然リモート形式で授業をしなければならなくなったため、教員の多くは急遽オンライン用教材の作成に追われ、てんてこ舞いの状況となった。学生たち中には、慣れないオンライン授業に不満を抱く者が少なからずおり、教員たちは、リモート形式の授業でいかに学生たちの学習意欲の低下を防ぎ、学習効果を維持するかに頭を悩ませることとなった。

その後、2022年2月にはコロナも少し落ち着いてきたため、新学期は対面授業でスタートした。しかし、4月も下旬になると、感染者数が増加し始めたため、再びオンライン授業を実施するかどうか選択を迫られることとなった。教育部（日本の文科省に相当）が二の足を踏む中、台湾大学が自らの判断でオンライン授業を実施することを宣言したため、教育部も各界の圧力を受け、すべての学校にオンライン授業を実施するよるとの布告がなされた。しかし、夏休みが終わる頃になると、コロナによる重症化率が下がり始め、政府の感染予防対策も次第に緩和して行った。9月の新学期が始まると、教育部は学校側に対面授業を回復するよう要請し、キャンパスへも自由に出入りができるようになった。そして2023年3月6日、授業中のマスク着用義務も解除されることとなったわけであるが、今でも多くの教員や学生がマスクを着用して授業に臨んでいる。

以上のように台湾のコロナをめぐる状況には起伏が見られるが、この3年間、基本的に多くの大学が学術活動の中止を余儀なくされた。例えば筆者が勤務している台湾師範大学国文学系では、もともと2年に1度、「儒道国際学術研討会」と「叙事文学与文化国際学術研討会」とを交互に開催していたが、どちらもコロナのため中止となった。しかし、台湾師範大学建学百周年記念行事の一環として企画された「伝承・変通・挑戦：漢学的視域融合国際学術研討会」は、2022年5月、オンラインと対面のハイブリット形式で挙行された。毎年定期的に開催されている院生を対象とした「国立師範大学国文学系研究生学術論文研討会」に関しては、2020年3月に開催される予定であった第26回は、一端延期となったものの、結

局は中止となり、紙面の論文集だけが印行された。第27回（2021年3月）、第28回（2022年3月）は、何れもハイブリット形式で行われ、第29回は、2023年3月に通常通りの対面形式で開催された。

なお、台湾南部の成功大学の中国文学系は、コロナ禍においても積極的に学術活動を展開した。2021年11月には第三回『『群書治要』学術研討会』、『籤詩文化』国際学術研討会』を、2022年10月には第十回「台大成大東華三校論壇」を、同年11月には第二回「海峽兩岸『左伝』学高端論壇」を、12月には第一回「出土文献語言文字研究国際学術研討会」を、そして今年の2023年には第一回「成大至善全国中文系研究生論文研討会」などを開催している。以上のシンポジウムは、何れも基本的には対面形式で開催されている。ただ、入国制限等により台湾に來られない海外の研究者のため、オンラインでも参加できるような配慮がなされた。

大学外の学術活動の状況を紹介しますと、例えば筆者の所属している「中国經学会」は、2年に一度「中国經学国際学術研討会」を開催し、通常では3カ国以上の海外の研究者を招聘しているが、2021年11月に開催された第十二回は、コロナのため、全面的にオンライン方式での開催となった。それから「台湾中文学会」の第110年度（2021）の年次大会は、コロナにより中止となったが、第111年度（2022）年の年次大会は、暨南大学において対面で開催された。

なお、筆者と政治大学中国文学系の車行健教授は、往事、台湾省立師範学院の師弟有志が設立した「人文学社」傘下の「人文友会」（前身は「哲学講座」）にならい、2018年に自発的学術組織「經学講会」を立ち上げた。発足以来、台湾師範大学国文学系に拠点を置き、台湾の各大学で經学研究に携わる師友たちと「經学講会」を企画、開催してきたが、このコロナ禍の3年間も中止することなく活動を続け、ハイブリット形式で講会を行った。コロナ禍にあり、対面での接触が制限されたため、講会のメンバー同士がLINEを利用して意見交換を行うことが常態化した。それに伴い、LINE上に作成した「經学講会」のグループに参加する同志の数も次第に増加し、現在グ

ループのメンバーは百人を超えている。その結果、学術交流や学術情報の流通に役に立つこととなった。2023年3月に見られる最新の話題としては、野間文史教授の近作『三禮注疏訓讀』と鶴成久章教授の近作『明代儒教思想の研究—陽明學・科举・書院』を台湾の書店を通して共同購入しようというものである。

この3年間、コロナにより台湾の大学や研究機関における学術活動は中止や延期を余儀なくされ、海外との学術交流も制限された。また、これまで当たり前とされてきた教学のあり方も大きな打撃を受けた。リモート形式での筆記試験で、いったい学生の学習成果を的確に把握できるのか。台湾では大学でもクラス分けをし、各クラスに担任が配属され、定期的に担任教員と学生とのミーティングが行われているが、リモート形式でのミーティングで、本当に教師と学生が心を通わせ合い、効果的な学習指導やカウンセリングが実現できるのか。コロナ禍の中、我々はこうしたかつて無かったような問題に直面し、考えさせられることとなった。だが、ここで否定できないのは、今、人と人との新たな交わり方や、教学のあり方が創出され、すでに実施され始めているということである。リモートでの会議や授業、学生指導は、実体として存在している空間上の境界を消滅させ、我々はクラウド上で出会い、つながり、交流することが可能となった。我々は今や、否応なく変化せざるを得ない状況に至っている。同時にまた、これまで拘ってきたある一定の学術交流、教学、学生指導のための「形式」というものについても問い直してみるよう迫られている。そもそも「形式」とは、それが如何なるものであれ、結局は忘却し捨てられるべき「筈」にすぎないのではないか。「魚を得る」ために、我々は、あらゆる斬新な試みに勇敢に取り組んでいかなければならないのではないか、と。

（藤井倫明改訳）

国内学会消息 (令和4年)

●北海道大学中国哲学會

例會

1月28日

・元弘相傳本『五行大義』背記における『説文解字』引用例考察(その一) 路 勝楠

・奥州市立高野長英記念館を訪ねて 田海 秀穂

2月18日

卒論成果發表会

・『論語と算盤』における『論語』解釈
—原義と現代的意義— 水野 大我

修論成果發表会

・歴代学者の評価から見る屈原形象の変遷 姜 夢軒

・後漢三賢について 凌 玲

・包山卜筮祭祷簡における天神・地祇・人鬼 趙 珊

・『史記』天官書及び北辰の研究 莫 寒

4月22日

・先秦時代の「就」字の変遷 和田 敬典

5月27日

・『易林』における神仙思想
—西王母を中心に— 楊 雯

6月22日

・『史記索隱』校勘一則 莫 寒

7月29日

・皇侃『論語義疏』から邢昺『論語注疏』へ 弮 和順

9月30日

・魏晋南北朝期の譜牒学と姓氏観 市村俊太郎

10月28日

・『戦国縦横家書』の読み方
—その史料的性格について— 近藤 浩之

11月26日

・東陵連教についての考察 趙 珊

北海道大学中国哲学會第五十二回大會 8月28日

・戦国時代における縦横家の君臣観 韓 佳辰

・易経文化と『楞嚴経』の諸相研究 常 馨月

・蘇秦の弁論術について 張 楽融

・歴代の編集者からみる『元秘抄』 長谷川健太

・江戸の漢学とパロディ 水上 雅晴

・曾點の氣象を巡って 小幡 敏行

(市村俊太郎・何 松延 記)

●北海道大学中国語・中国文学談話會

刊行物

『火輪』第43號(5月)

(藤井 得弘 記)

●秋田中国学会

春季第172回例会 5月21日 於秋田大学

・中国におけるペストの流行 内田 昌功

・ICTを活用した漢文授業(『論語』『葉公語孔子曰』を例に) 秋山 恵美

秋季第173回例会 11月26日 於秋田大学

・荀子における性内の心と性外の心
—存在と価値の弁別および関与— 吉永慎二郎

(羽田 朝子 記)

●東北中国学会

第70回大会 5月28日

オンライン開催(中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

・宮殿賦としての王延寿「魯靈光殿賦」についての考察
—漢賦の宮殿描写と比較して— 木村真理子

・敦煌出土『鍼灸甲乙経』残片と伝世の『黄帝内経太素』
『黄帝鍼灸甲乙経』抄本の比較 浦山 きか

・張説の碑誌文とその変革の意義 金 鑫

・「折腰体」とはいかなるものか
—三浦梅園『詩轍』の観点を中心に— 陳 俐君

・正徳年間における魏校の思想活動

—余祐『性書』に対する批判を焦点として— 費 康幸

- ・葛寅亮『四書湖南講』の研究
一学庸を中心に 丁 欽馨
- ・快樂とディストピア—穆時英「ナイトクラブの五人」
を中心に— 福長 悠
(齋藤 智寛 記)

●東北シナ学会 (中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

二月例会 2月17日

[卒業論文発表会]

- ・李清照研究 横山 桃子
- [修士論文発表会]
- ・岳雲像の変遷について—『大宋中興通俗演義』と『説
岳全伝』を中心に— 張 書祺
- ・『論語義疏』における皇侃の性情論 余 中原
- ・明末の科挙と四書学 丁 欽馨
(高橋 亨・菅原 尚樹 記)

●東北大学中国哲学読書会

第208回 11月11日

[卒業論文構想発表会]

- ・葛洪の神仙思想 山口みなみ
- ・『清浄法行経』について 柳澤 瑞希
- ・洞山良价研究 佐久間泰晟
(高橋 亨 記)

●東北大学中国文学研究会

中文談話会—卒業論文構想発表会 7月22日、29日

- ・阮籍の「詠懐詩」八十二首について 氏家 彦斗
- ・『燕雲台』で表される蕭燕燕の人物像 小松由美香
- ・『聊齋志異』における女性同士の親密な関係について
根本 侑実
- ・役割語から見る中国語漫画作品の人物描写研究
打田南菜果

中文談話会—卒業論文中間発表会 11月4日

- ・『聊齋志異』における女性同士の親密な関係について
根本 侑実
- ・『燕雲台』の研究 小松由美香

- ・役割語から見る中国語漫画作品の人物描写研究
打田南菜果
(菅原 尚樹 記)

●筑波中国学会

研究発表会 オンライン開催

10月21日

- ・司空曙の修飾語「新」の使い方
—「新霜」に着目して 福原 早希

11月11日

- ・『捜神記』における報いと復讐との違いについて
歐陽 懷蒙
(稀代麻也子 記)

●中国文化学会

大会 6月25日 於都留文科大学

[研究発表]

- ・明治前期における漢学者の清国渡航
—「文化運搬者」の視点から— 閻 秋君
- ・教科書としての『万国史記』
—「希臘記」を中心に— 木村 淳
- ・「雲端」について 後藤 英明
- ・李翱の文は韓愈をどう受け継いだか 谷口 匡
- ・書かれた注釈、話された注釈
—論語義疏から— 高橋 均

[講演]

- ・『万葉集』巻五の世界と中国文学—大伴旅人・山上憶
良・吉田宜の漢文と和歌— 安藤 信廣

例会 3月12日 オンライン開催

- ・阮籍「詠懐詩」試論 村越 充朗
- ・章学誠における言と意
—「劉言史法、吾言史意」を糸口として— 渡邊 大
刊行物

『中国文化—研究と教育—』第80号 (6月)

(内山 直樹 記)

●お茶の水女子大学中国文学会

大会 4月16日 オンライン開催

- ・金陵をうたう王安石 和田 英信
- ・中国語における「流水文」の研究 橋本 陽介

7月例会 7月2日 オンライン開催

- ・民間文芸に継承された「舜子変」と、そこから探る「舜子変」の欠損部について 大西由美子
- ・謝朓詩における「慕婦」とその場所 董 子華

9月例会 9月3日 オンライン開催

- ・明代の四川における提学官の実績について 陳 坤
- ・「拉壮丁」から見る沙汀1931年-1949年の小説創作 潘 一嵐

12月例会 12月3日 オンライン開催

- ・凌叔華『中華儿女』の日本人表象を再読する：松岡洋右との交流を参照軸として 阿部 沙織
- ・杜甫詩における混沌への憧憬 呉 優美子
- ・批評語としての「不可解」—明末清初の詩的言語論における一考察 水津 有理 (竹野 洋子 記)

●六朝学術学会

第26回大会 9月10日 於早稲田大学(ハイブリッド形式)

[報告]

- ・劉炫の生涯とその学問 田尻 健太
- ・呉均の詩と『玉臺新詠』 呉 雨清
- ・南朝における蔡氏 洲脇 武志
- ・鮑照詩の自然描写に関する考察 宋 吟

[講演]

- ・表現する阮籍 一六篇の「賦」の基点から考える 大上 正美

第43回研究例会 3月19日 於早稲田大学(ハイブリッド形式)

[報告]

- ・裴松之『三国志注』に見られる史料批判の検討 袴田 郁一
- ・庾信「哀江南賦」における〈わたし〉について 樋口 泰裕

- ・五世紀における詩歌観の変質

—その淵源とその波及—

佐竹 保子

刊行物

『六朝学術学会報』第23集(3月)

(山崎 藍 記)

●日本杜甫学会

第6回大会 9月10日 京都女子大学(オンライン併用)

[研究発表]

- ・「行雲流水」と杜甫 鳴海 雅哉

[シンポジウム]

- ・安史の乱は杜甫に何をもたらしたのか—「自京赴奉先県詠懷五百字」以降の杜甫詩の展開について— 好川 聰
- ・杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について —安史の乱の前後を中心に— 遠藤 星希
- ・杜甫の月が照らすもの 高芝 麻子

刊行物

『杜甫研究年報』第5号(3月)

(紺野 達也 記)

●中唐文学会

大会 10月7日 オンライン開催

[研究発表]

- ・明代における白居易の評価 —唐汝詢『唐詩解』を中心に— 陳 禕璇

[特別企画]

- ・中唐文学会の研究会・読書会について 劉錫錫読書会 長谷川真史
- 東山之會 加藤 聰
- 『詩詞曲語辞典』翻訳研究会 高橋 未来

刊行物

『中唐文学会報』第29号(10月)

(長谷川真史 記)

●日本宋代文学学会

第9回大会 11月26日 オンライン開催

[研究発表]

- ・世界の終わり
一文天祥「山河破碎」句をめぐって 村田 真由
- ・王安石古文文体の実証的考察 東 英寿・久保山哲二

第1回宋代書簡シンポジウム

JSPS 科研費基盤(B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催／日本宋代文学学会共催

- ・宋代書簡研究の可能性 東 英寿
- ・蘇軾文学における清貧と闊達 内山 精也
- ・劉克莊の書信より見た「済王冤案」と「梅花詩案」
平田 茂樹

刊行物

『日本宋代文学学会報』第九集

(奥野新太郎 記)

●日本聞一多学会

第25回大会 10月22日 於二松学舎大学

第一部 聞黎明先生追悼会

- ・私がみた聞黎明さん：おおらかさと周到さと
水羽 信男
- ・聞黎明さんの思い出 小林 基起
- ・不可忘記の学者—聞黎明先生 田 偉
- ・2015年10月31日研究会での聞黎明さんの挨拶（ビデオ提供） 李 素楨
- ・挨拶 聞 亭

第二部 研究大会

- ・森槐南の中国小説史研究に関する一考察
一塩谷温と魯迅との関連から 石 高原
- ・日本における「眉間尺」物語と魯迅の「鑄劍」
鄧 捷

刊行物

『神話と詩』第19号（3月）

(横打 理奈 記)

●日本漢詩文学会

<https://nihonkanshibun.jimdofree.com/>

第16回例会 9月10日 於共立女子大学

- ・オープニング演奏（弦楽アンサンブル）メンデルスゾーン 弦楽のための交響曲 第九番第一楽章
アンサンブル凛
- ・ヨーロッパにおけるバレエの起源と日本への移入
国松樹里香
- ・英国における外国語教育と漢字学習の現状と課題
市山 陽子
- ・墨家の兼愛と儒家の差等愛
—両者の「愛」の意味をめぐって— 中嶋 諒
- ・教科書編集時代の思い出 石川 美穂
(松野 敏之 記)

●日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

9月3日、4日 於中京大学（オンライン併用）

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

『唐宋名家詞選』譯注検討會

3月12日～14日 オンライン開催

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

小風絮會（『唐宋名家詞選』譯注）

1月29日、6月19日、7月23日、10月29日、12月17日

於立命館大學（オンライン併用）

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

刊行物

『風絮』第19號 青山宏先生・村上哲見先生追悼記念論集（12月）

(藤原 祐子 記)

●國學院大學中國學會

第222回例会 1月7日 オンライン開催

- ・朱熹における「日用」と「性情」について 今瀬英一郎
- ・神虎召魂法に見る儀礼伝統の重層について 浅野 春二

第223回例会 10月22日 オンライン開催

- ・九尾狐における変容の様相
—唐代、宋代を中心に— 曹 喆翔
- ・阮籍「東平賦」小考 今瀬英一郎

第223回例会終了後、研究会成果報告（オンライン開催）

第64回大会・総会 10月23日 オンライン開催

[公開講演]

- ・父と子—蘇軾・陸游の詩における「孝」をめぐる— 浅見 洋二

[研究発表]

- ・上巳風俗考—『後漢書』礼儀志と『荆楚歲時記』を中心に— 童 華軍
- ・劉知幾の『漢書』五行志批判について 名越 健人
- ・中村惕齋『筆記書集傳』管見 青木 洋司
- ・江戸時代前期における『小学』受容の一例
—『小学句読集疏』を中心に— 松野 敏之
- ・後漢末 門辺の詩文について 宮内 克浩

研究会

- ・唐代文学研究会（毎週火曜日、対面）
—『宣室志』・『唐詩解頤』の読解— 澤崎 久和
- ・中国哲学史研究会（毎週木曜日、対面）
—『儒門語要』の読解— 青木 洋司
- ・中国現代文学研究会（毎週火曜日、対面）
—謝冰心『再寄小説者』の読解— 牧野 格子
- ・中国礼俗文化研究会（毎週金曜日、対面・オンライン併用）—『上清靈寶大法』の読解— 浅野 春二

中國學會奨励章表彰 3月20日

[修士論文]

- ・劉知幾『史通』研究
—その学問形成と展開を中心として— 名越 健人

[卒業論文]

- ・楚辭「惜誦」堅志考
—厲神占夢を端緒として— 井上 黎

刊行物

『國學院中國學會報』第67輯

『崑崙』第232号～第234号

(青木 洋司 記)

◎早稲田大学東洋哲学会

第三十九回大会 6月11日 於早稲田大学

[研究発表]

- ・『心性罪福因縁集』巻中第十三話と伝源信『法華経読誦観』
—平安後期『法華経』読誦法の一側面— 崔 鵬偉
- ・南宋における華嚴宗章疏の刊刻と教学の展開
—智儼撰『孔目章』を例に— 桜井 唯
- ・古靈宝経に於ける『法輪罪福』の位置付け 林 佳恵
- ・張九成『孟子伝』考察
—心の「幾」を中心に— 松野 敏之
- ・ガンダルヴァの都城
—『根本中観頌』の意味— 齋藤 直樹

[講演]

- ・日本古写経『金剛場陀羅尼経』（国宝本・五月一日経本・七寺一切経本・興聖寺一切経本）について

落合 俊典

刊行物

『東洋の思想と宗教』第三十九号（3月）

(関 俊史 記)

◎早稲田大学中国文学会

第47回春季大会 6月25日 ハイフレックス開催

[研究発表]

- ・余華《西北風呼嘯の中午》にみる先鋒派のリアリティ
—「喪失」に由る自己形成を中心に— 岡崎 至秀
- ・越境作家イーユン・リーにおける「はずれ者」
—逸脱という可能性— 郭 濟飛
- ・「説唐」における休妻故事について 柴崎 美子

[講演会]

- ・江戸時代の中国戯曲研究と翻訳の動向 伴 俊典

第47回秋季大会 12月3日 ハイフレックス開催

[研究発表]

- ・中国SFの中のポストヒューマンズム
—王晋康を中心に— 陳 哲銘
- ・元雜劇「楔子」再考
—「北曲劇末有楔子」説を中心に— 李 家橋

[講演会]

・Digを「掘る」—初級中国語教育の科学 楊 達
刊行物
『中国文学研究』第48期(12月)

(伴 俊典 記)

●慶應義塾中国文学会

第七回大会 7月2日 オンライン開催

[発表]

- ・文学と歴史の対話—話劇『曙光』を中心として
崔 靖宜
- ・元和・長慶期における元白の詩観の相違について
席 暢
- ・毛宗崗本『三国志演義』の人物評価
—蜀の人物を中心に— 鶴浦 恵

[講演]

- ・現代日本の長編小説における「三国志」の受容について—吉川英治・柴田錬三郎・陳舜臣・北方謙三・三好徹・宮城谷昌光— 吉永 壮介
- ・被拔高的作家和被贬低的史书 陳 正宏
(関根 謙 記)

●名古屋大学中国哲学研究会

刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第21号(5月)
(佐野 大介 記)

●京都大学中国文学会

第37回例会 7月9日 於京都大学(オンライン併用)

- ・黄遵憲と石川鴻齋 趙 偵宇
- ・独遊する山水
—廬山慧遠と謝靈運の詩をめぐって 堂 蘭 淑子
- ・梁山泊副頭領、盧俊義から「勅勒歌」まで 金 文京

刊行物

『中国文学報』第95冊(4月)
(緑川 英樹 記)

●中国藝文研究会

合評会・研究会 4月24日 オンライン開催

- ・「集曲名詞」考論 萩原 正樹
- 研究会 7月31日 於立命館大学(オンライン併用)
 - ・『列仙傳』の服薬を推奨する理由
—漢代の神仙術との対照 許 曉璐
 - ・『神仙傳』と六朝までの神仙・神人・真人・仙人像の對比—超自然現象を中心として— 宮本 紗代
 - ・『李遠詩集』考 高井 龍
 - ・唐代小説の中の詩の機能
—「鄭德璘傳」を例として 唐 鈺
 - ・蘇轍の後半生における仕官・隱棲に對する考え方について 鄭 玲玉
 - ・三好達治「雪」をめぐる斷想 今場 正美

合評会・研究会 9月18日 於立命館大学(オンライン併用)

- ・自然災害や疫病から見る『列仙傳』の服薬を推奨する理由 許 曉璐
- ・高橋玉蕉の詠物詩の「和の趣味」について 詹 斐雯

刊行物
『學林』第七十四號(5月)

『學林』第七十五號 中國藝文研究会四十周年記念論集(12月)
(萩原 正樹 記)

●東山之會

研究発表 於京都女子大学(オンライン併用)

5月21日

- ・我が師の恩(吉川幸次郎・小川環樹・清水茂・高橋和巳の諸先生、尾崎雄二郎・入谷仙介・加地伸行の諸先生等について) 下定 雅弘

7月23日

- ・月性詩の写本について 愛甲 弘志

9月24日

- ・唐代の「仄韻律詩」について 金 鑫

11月26日

- ・煙艇詩想：陸游漁隱詩書寫探析 鍾 曉峰

12月7日

・僧侶を送る詩—讀賈島詩札記— 齋藤 茂

『長江集』譯註 5月21日～12月7日

卷四「寄李存穆」至「寄遠」

(加藤 聰 記)

●阪神中哲談話会

第405回例会 12月4日 於関西大学

[公演]

・甲骨学研究方法簡略史 末次 信行

[坂出祥伸先生、野村茂夫先生、後藤延子先生を偲ぶ会]

・追悼の辞 吾妻 重二

・坂出祥伸先生のご業績—「[気]と道教・方術の世界」
「道教とはなにか」を中心として 山田 明広

・野村茂夫先生の莊子訳と教学 鈴木 達明

・後藤延子先生を追悼して—梁漱溟「究元決疑論」、王国
維の哲学 韓 莉

・3先生を偲んで 大形 徹・奈良 行博
(橋本 昭典 記)

●大阪大学中国学会

刊行物

『中国研究集刊』第68号 [重号] (8月)

電子版 <https://www.chugoku-kenkyu-shukan.org/>

(湯浅 邦弘 記)

●懷徳堂研究会

<https://www.kaitokudo-kenkyukai.org/>

第33回研究会 10月30日 於大阪大学

・大阪市公会堂壁記の成立
—関西文人の相互研鑽について— 湯浅 邦弘

・懷徳堂の重建を支えた帝大人脈に関する一考察—西村
天囚をめぐる近年の調査研究をふまえて 陶 徳民

・二松学舎に所蔵する西村天囚関係資料—古典講習科の
人々の交流を中心として— 町 泉寿郎

・西村天囚の懷徳堂研究と新資料
—『懷徳堂考之一』と『懷徳堂資料』— 竹田 健二

(竹田 健二 記)

●中国出土文献研究会

<http://www.shutudo.org/>

第74回研究会 2月19日・20日 オンライン開催

・『安徽大学蔵戦国竹簡(一)』所収『詩経』簡の竹節と
劃痕 竹田 健二

・北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章復原
—『漢書』芸文志所載二十章本考— 福田 哲之

・中国における孤虚占について
—敦煌文献P2610を中心として 椛島 雅弘

・「若手研究者竹簡學國際會議」開催報告 草野 友子

・《殷高宗問於三壽》的“德”和“音” 曹 方向

・清華簡『五紀』に見える黄帝・蚩尤伝承 湯浅 邦弘
(湯浅 邦弘 記)

●広島大学中国思想文化化学研究室研究会

第214回研究会 2月8日

[卒業論文発表会]

・古代中国の説明神話について 石松 紗英

・自由民権運動に及ぼす雲井龍雄の作用について
遠藤 瑞希

・『搜神記』と『漢書』五行志から見る古い師像
白井 祥樹

・荻生徂徠の葬祭礼観 福原 凜

・吉田松陰の獄中教育について

—野山獄同囚との交流を中心に— 毛利 彩香

・辛亥以降の章炳麟の政治行動 吉川 悠介

第215回研究会 10月25日

[卒業論文中間発表会]

・唐・宋における麻姑
—唐詩・宋詩詞を中心として— 榎本 恵

・塩鉄論の研究 大賀 史也

・山海経にみられる鳥 清水 堅登

・『抱朴子』外篇行品篇における「神」 千鶴 恵史

・荀子の政治的思想について 高森 海貴

・劉宝楠『論語正義』研究 西本 尚太

・神仙化のメカニズム 森本 聖洋

第216回研究会 12月13日

[卒業論文テーマ発表会]

- ・身体論からみる魃物系薬物の成立 荒木 遙
- ・時代に伴う龍の扱いの変遷 澤井 智広
- ・異常出生譚がもつ意味について
- 母胎が禁忌を犯した場合を中心に— 鈴木 花
- ・冥界の使者とその文化的背景について 山本 智恵

刊行物（発行人 東洋古典學研究会）

『東洋古典學研究』第53集（5月）

『東洋古典學研究』第54集（10月）

（有馬 卓也 記）

●広島大学中国文学研究室研究会

第230回 1月27日

[修士論文最終発表]

- ・「平復帖」における人物について 楊 春雨

第231回 2月4日

[卒業論文最終発表]

- ・『李卓吾先生批評三国志』における批評
- 諸葛亮の評価について— 西岡 大気
- ・呉用と諸葛亮の類似点について—『水滸伝』における
- 呉用の人物像を中心に— 濱本 利音
- ・岡島冠山著『唐話纂要』研究
- 構成と内容について— 桑原あずみ
- ・近代日本における中国語学習の変遷 小田 直弥
- ・「奔月」を除く『故事新編』中の食べ物メタファー
- 高尾 俊輝

第232回 5月26日

[中四国地区中国学会事前発表]

- ・明治期の新聞における梁啓超像について
- 戊戌変法前後の記事を中心に— 張 淑君

第233回 6月30日

[修士論文中間発表]

- ・「二拍」と『太平広記鈔』 陳 傑爽
- ・「異史氏曰」における異類について 黄 舒銘
- ・魯迅の『地底旅行』における「創作」 劉 宗源

第234回 7月28日

[修士論文最終発表]

- ・傳玄の物語的楽府の成立 曾 令之
- ・『金瓶梅』における潘金蓮の自称表現について
- 朱 未
- ・『情史類略』における題上の圈点について 高 玥峰

[卒業論文構想発表]

- ・「干将莫邪」説話の起源
- 先秦時代から『搜神記』まで— 大橋 侑悟
- ・駱賓王における秋について 平山 眞衣
- ・『太平広記』畜獸部における「犬」のイメージについて
- 金子 由佳

- ・『封神演義』の紂王描写について
- 先行書と比較して— 藤原 朋夏

- ・『聊齋志異』における狐の変身譚 村本 学
- ・江戸・明治期における字引の濫觴 芥米 龍

第235回 11月24日

[卒業論文中間発表]

- ・『太平広記』畜獸部における動物の描写について
- 金子 由佳

- ・『封神演義』の妲己描写について
- 紂王と比較して— 藤原 朋夏

- ・『聊齋志異』以前の狐の変身譚 村本 学
- ・『十八史略字引』の変遷とその特徴 芥米 龍
- ・明治漢語に関する研究

- 森鷗外の『塵塚』を中心として— 平山 眞衣
- ・詩語、文語としての「干将莫邪」 大橋 侑悟

第236回 12月22日

[修士論文構想発表]

- ・『太平広記』の「神」部について
- 配列を中心に— 董 芸星
- ・李漁と『閑情偶寄』 李 心怡

[修士論文中間発表]

- ・「二拍」の女性描写
- 『太平広記』からの書き換えを中心に— 陳 傑爽
- ・「異史氏曰」と物語との関連性について 黄 舒銘

刊行物

『中国学研究論集』第40号（9月）

（川島 優子 記）

●中国中世文学会

令和四年度研究大会 10月29日 於広島大学

- ・『唐詩選』における閨怨詩の収録状況
— 『唐詩三百首』との比較を通じて— 馬 艶艶
- ・古典詩に見られる「春花秋月」
— 魚玄機の「題隱霧亭」を中心として— 王 若冲
- ・平安朝前期における漢詩創作
— 「詩媒」をめぐる— 鹿島 大吾
- ・謝靈運の「賞心」の受容
— 『文選』所収作品を中心に— 中木 愛
- ・六朝における詩語としての異民族 佐伯 雅宣
- ・『文選』と浮雲
— 『文選』李善注の活用の一例として— 佐藤 大志

刊行物

『中国中世文学研究』第75号（3月）

（川島 優子 記）

●山口中国学会

例会 7月9日 於山口大学

- ・死のテーマパーク豊都 — 中国重慶市豊都県鬼城廟会
における鬼の神格をめぐる一考察 曾 力

大会 12月24日 於山口大学

- ・殷周時代の穀物利用に関する予察
— 考古資料を中心に 鈴木 舞
- ・明の四夷館での外国語教学の実態について 更科 慎一
（根ヶ山 徹 記）

●中国四国地区中国学会

第67回大会 6月4日 於岡山大学

- ・唐代詩人・王維の嵩山にまつわるネットワークについて 内田 誠一
- ・敦煌及び西域出土文獻から見る唐五代宋初の「做書」 任 占鵬

- ・『聊齋志異』画皮小考 高西 成介
- ・菅原道真における『白氏文集』の摂取態度
— 「北窓三友」を中心に 劉 麗丹
- ・吉田松陰と頼山陽の「西遊」 鎌田 出
- ・明治期の新聞における梁啓超について
— 戊戌変法前後の記事を中心に 張 淑君
- ・日中現代文化における哪吒イメージの継承と変化 周 心怡

[講演]

- 八旗制からみる清朝史研究 鈴木 真
（橘 英範 記）

●九州中国学会

第70回大会 5月7日 オンライン開催

- ・漢語青海方言と言語接触 川澄 哲也
- ・『講周易疏論家義記』初探
— 体用思想および感應思想を中心に— 吉岡 佑馬
- ・江淹「麗色賦」について 西川 ゆみ
- ・周春『杜詩双声疊韻譜括略』について 汪 洋
- ・遊敬泉刊『李卓吾批評合像西廂記』について 黄 冬柏

・文之玄昌の琉球国に関する詩文について 上ノ原怜那
刊行物

『九州中国学会報』第60巻（5月）

（藤井 倫明 記）

●九州大学中国文学会

第317回中国文藝座談会 3月5日 ハイブリッド開催

- ・『編蓬集』に見える唐汝詢の交友関係 陳 禕璇
- ・周春の『杜詩双声疊韻譜括略』について 汪 洋
- ・唐憲宗元和年間唐代詩人雲南書寫的兩個面向 段 天姝

第318回中国文藝座談会 4月30日 ハイブリッド開催

- ・趙翼「題周松鶴『雙聲疊韻譜括略』」とその杜甫受容に
ついて 汪 洋
- ・清華大学教授銭稲孫の懷徳堂訪問 稲森 雅子
- ・唐憲宗元和年間唐代詩人雲南書寫的兩個面向II :

元白詩文中雲南書寫的不同傾向探源 段 天姝

・白居易「遊悟真寺」詩の受容から見る清代中期詩壇の
一側面—趙翼・翁方綱を中心に 汪 洋

・三言二拍に見える武人 井口 千雪

第319回中国文藝座談会 7月16日 ハイブリッド開催

・『盛明雜劇二集』所収「相思譜」について 岩崎華奈子

・東亜同文書院の伝統的教授法『念書』について

中里見 敬

第320回中国文藝座談会 9月24日 ハイブリッド開催

・明代における白居易の評価

—唐汝詢『唐詩解』を中心に— 陳 禕璇

・趙翼の双声疊韻対偶研究とその意義について

汪 洋

・劉歆「遂初賦」について 栗山 雅央

第321回中国文藝座談会 11月26日 ハイブリッド開催

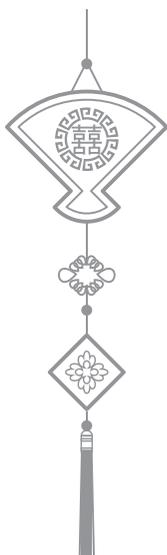
・袁枚詠史詩の特徴—女性故事を中心に— 張 茜

・唐汝詢と日本 静永 健

刊行物

『中国文学論集』第51号（12月）

（岩崎華奈子 記）



2023-24年度 各種委員会委員の構成

理事長：大木 康

副理事長：浅見 洋二（担当：論文審査、出版、広報、会計）

吾妻 重二（担当：大会、選挙管理、研究推進・国際
交流、将来計画特別）

各種委員会委員（◎：委員長、○：副委員長、◆：幹事）

大会委員会

◎野村 鮎子 ○伊東 貴之 内山 直樹
川島 優子 小島 毅 陳 捷
東 英寿 ◆西川 ゆみ

論文審査委員会

◎小松 謙 ○中島 隆博 近藤 浩之
佐川 英治 佐藤 大志 志野 好伸
末永 高康 高山 大毅 竹越 孝
谷口 洋 中里見 敬 濱田 麻矢
林 文孝 堀川 貴司 町 泉寿郎
松浦 恆雄 松江 崇 緑川 英樹
横手 裕 ◆荒木 達雄

出版委員会

◎高津 孝 ○古勝 隆一 秋谷 裕幸
吾妻 重二 宇佐美文理 小川 恒男
洲脇 武志 ◆池田 恭哉

選挙管理委員会

◎渡邊 義浩 ○松野 敏之 井川 義次
垣内 景子 稀代麻也子 ◆中嶋 諒

研究推進・国際交流委員会

◎三浦 秀一 ○鈴木 将久 工藤 卓司
酒井 規史 佐野 誠子 田村 容子
◆齋藤 智寛

広報委員会

◎上田 望 ○木津 祐子 閻 淑珍
錢 鷗 山下 一夫 ◆笠見 弥生
◆陳 佑真

将来計画特別委員会

◎弮 和順 ○柳川 順子 秋吉 收
大平 幸代 早坂 俊廣 松尾 肇子
◆吉田 勉

各種委員会報告

【論文審査委員会】

委員長 渡邊 義浩

○学会報第75集応募論文の審査の経緯

- ・2023年1月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全39篇（哲学・思想部門10篇、文学・語学部門17篇、日本漢学部門7篇、歴史部門5篇）であった。1月28日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員（論文審査委員会委員1名を含む）を決めた。
- ・3月18日オンライン開催の論文審査委員会において、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門1篇、文学・語学部門7篇、日本漢学部門2篇、歴史部門4本の計14篇を掲載する方向性を定めた。今回、枚数超過や形式不備と認められた論文は皆無であった。来年以降も引き続き、「執筆要領」の遵守にご注意いただければ幸いである。

○その他、3月18日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第76集依頼論文執筆候補者（評議員2名、一般会員2名）を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・文学・語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。

【将来計画特別委員会】

委員長 弼 和順

○2022年度大会アンケート結果報告

第74回大会は、2022年10月8日・9日、早稲田大学を会場とし、対面およびオンラインによるハイフレックス方式で開催されました。同月半ばから翌年2月末日まで、本学会ホームページにて、「2022年度大会アンケート」を行ったところ、198名から回答を得ました（昨年は118名、一昨年は48名）。全回答のうち、対面での参加者は75名

（37.9%）、オンラインでの参加者は71名（35.9%）、不参加者は52名（26.3%）でした。回答に協力くださった会員には心より深謝申し上げます。

本報告では、【Ⅰ】対面参加者からの回答、【Ⅱ】オンライン参加者からの回答、【Ⅲ】すべての回答の三部に分けて、結果を提示します。詳細については、本年5月ごろ、本学会ホームページに掲載することとし、ここでは概括的な報告にとどめます。

【Ⅰ】対面参加者からの回答

◇対面による実施方法について

「大変よかった」が42名（56%）と最も多く、「よかった」が27名（36%）と続いた。自由記述では「最も理想的な形態で実施いただいた」「会場の雰囲気共有できたことは大きい」「対面の場にいた人同士の交流はよかったが、オンライン参加の人とは没交渉に終わった感が否めない」などの回答があった。

◇研究発表・質疑応答の時間（25分間）について

「適当である」が64名（85.3%）、「短すぎる」が11名（14.7%）であった。

◇司会のコメント及び質疑応答の方法について

「よかった」が35名（46.7%）と最も多く、「大変よかった」が28名（37.3%）と続いた。自由記述では「オンラインで参加している会員も多いため、フロアからの質問が少なく寂しかった」「司会がYouTubeでのコメントを、会場からの質問と合わせて拾うのは、その仕事として、時間的にかなり難しい」などの意見があった。

◇発表と発表の間の休憩時間（5分間）について

「適当である」が55名（73.3%）と最も多く、「短すぎる」が17名（22.7%）と続いた。

◇総会について

「よかった」が13名（40.6%）と最も多く、「大変よかった」が10名（31.3%）と続いた。

◇大会の方式（ハイフレックス方式・リアルタイム方式・

オンデマンド方式) について

「ハイフレックス方式」希望が51名(69.9%)、「いずれともいえない」が14名(19.2%)「リアルタイム方式」希望が8名(11%)であった。一昨年は「オンデマンド方式」希望、昨年は「リアルタイム方式」希望が多かったが、今年は「ハイフレックス方式」希望が圧倒的に多かった。自由記述では「ハイフレックス方式」を支持する意見として「選択肢が多様である」「遠方にいる身としては参加しやすい」「発表者と司会者の拘束時間と負担が減る」などがあつた。また「いずれともいえない」という回答の中には「理想をいえばハイフレックス方式が望ましいが、それを開催校に強いるのは避けるべきである」のように、開催校への負担を考慮すべきとの意見が複数あつた。

【II】オンライン参加者からの回答

◇オンラインによる実施方法について

「よかつた」が28名(39.4%)と最も多く、「大変よかつた」が27名(38%)、「いずれともいえない」が15名(21.1%)と続いた。自由記述では「発表資料をダウンロードし、会場にいるのと同様に資料を見ながら発表を聞くことができた」「興味がある発表を繰り返して聞くことができた」「オンライン上で気軽に入退室でき、音声や画像も安定していた」などの回答があつたが、一方で「会場の空気あまり伝わらなかつた」「質問がチャットに限られ、不便を感じた」という意見もあつた。

◇研究発表・質疑応答の時間(25分間)について

「適当である」が63名(90%)、「短すぎる」が7名(10%)であつた。

◇司会のコメント及び質疑応答の方法について

「よかつた」が28名(39.4%)と最も多く、「大変よかつた」が20名(28.2%)と続いた。

◇発表と発表の間の休憩時間(5分間)について

「適当である」が65名(91.5%)と最も多く、「短すぎる」が5名(7%)と続いた。

◇総会について

「いずれともいえない」が10名(40%)と最も多く、「大変よかつた」が8名(32%)と続いた。

◇大会の方式(ハイフレックス方式・リアルタイム方式・オンデマンド方式)について

「ハイフレックス方式」希望が44名(62.9%)、「いずれともいえない」希望が14名(20%)、「リアルタイム方式」希望が11名(15.7%)で、対面参加者からの回答と同じ傾向が見られた。自由記述では「対面がベストであるが、オンライン開催もやむを得ない。その中でハイフレックスが対面に一番近い」「会場に行けない場合でも、大会に参加できる」「対面のみより多数の会員が参加できる」などの回答があつた。

【III】すべての回答

◇大会参加に関わる連絡のしかたについて

「よかつた」が64名(34.6%)と最も多く、「大変よかつた」が51名(27.6%)と続いた。自由記述では「ハイブリッド方式の運営は大変だつたと思う。感謝します」などの回答が多く寄せられたが、一方で、「開催校には、その準備に追われたのはわかるが、大会案内等が遅れがちであつた」「告知から振込み期限までの期間が短かつた」「振込先に間違いがあつた」などの指摘もあつた。

◇研究発表資料の公開方法(参加予定者にパスワードを送り、各自がダウンロードする)について

「大変よかつた」が70名(39.3%)と最も多く、「よかつた」が67名(37.6%)と続いた。自由記述では「ダウンロードに手間取つた」「シンポジウム単位や部会単位で一括でダウンロードできる方法があればよい」という回答があつた。

◇研究発表資料の公開期間(10月6日～11日)について

「よかつた」が63名(35.2%)と最も多く、「大変よかつた」が58名(32.4%)と続いた。自由記述では「もう少し公開期間が長くてもよかつた」という意見が複数あつた。

◇次世代シンポジウムおよび書評シンポジウムの実施について

自由記述では、全体として「意義のある取組であつた」「今後もこのような企画を積極的に充実させていくのがよい」という回答が多かつた。とりわけ、書評シンポジウムに対する反響が大きく、「大会に新しい風をもたらした」

「若手の励みになる」「今後も続けてほしい」など、肯定的な意見が多かった。その中で「研究発表の時間を減らさずに、上手にプログラムに組んでほしい」「誰の著作が選ばれるかで成否が変わってくるため、いつでも出来る企画ではない」「選ばれた人と漏れた人との落差が大きく、かりに不公平感があると、将来の学会活動に影響することが危惧される」など、改善を求める意見もあった。

◇託児所の設置について

寄せられた自由記述では「大変有意義な試みであった」「今後も継続してほしい」のような肯定的な回答が多かった。

◇日本中国学会全般について

「学会として、大会は重要な活動の一つであることは変わらないので、開催校のみならず、会員皆で協力して発展させていくことが必要である」「歴史部門は、継続的に設置できるかどうか検討の余地がある」「もし学会報がデジタルで見られるのであれば、冊子で配布する従来のやりかたを見直して、必要な人だけに送付するのでもよい」「年に1回のみのおの大会の他に、何か活動が必要だと思われ、大会以外の学会の活動について、アンケートを取った方が、学会全体の活動がさらに充実する」などの意見があった。

【研究推進・国際交流委員会】

委員長 三浦 秀一

昨年度は単独の学会企画として挙行政した書評シンポジウムを、今秋開催の学会大会では、定例会のひとつである「パネルディスカッション」の分科会として実施します。この企画が学会の活動として定着することを意図した位置づけの変更ですが、登壇者の専門領域・所属機関・性別などについて、多様性を考慮したフレッシュなパネルを歓迎する点は、昨年度と同様です。下記の募集要項をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

◎書評シンポジウム募集要項

1. 構成・形態：著者1名、評者3名程度、司会者1名によるパネル型書評会。
2. 時間：報告と質疑応答をあわせて120分以内。

3. 締切：「研究発表の募集」（「学会便り」本号裏表紙所掲）の「3. 締切」と同じです。
4. 応募方法：パネルの代表者（もしくは連絡担当者）が、パネリスト全員の氏名（フリガナ、所属機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、書評の対象とする学術書のタイトルとその「概要」（800字以内、日本語による。目次の掲載も可）を、「研究発表の募集」の「4. 応募方法」と同様の方法により大会準備会宛て送付してください。
5. 応募資格：著者と司会者、および評者2名以上は本学会の会員資格を有していることを条件とします。書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、2019年～2021年に刊行されたもの。評者の年齢は、あくまでも原則ですが、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下とします。
6. 応募宛先：「研究発表の募集」の「6. 応募宛先」と同じです。
7. 問い合わせ先：学会事務局（info@nippon-chugokugakkai.org）

学会 HP の『研究集録』には、昨年度のシンポジウムに登壇された評者各位による報告の文章を掲載しました。是非ご一読ください。



事務局より

◎評議員の一部交代について

評議員1名が退会したため、令和4年6月実施の令和5・6年度評議員選挙の結果にもとづき、下記のとおり、1名の会員が繰り上げ当選となりました（任期は2023年4月10日から2025年3月31日まで）。

- ・退任の評議員（退会による）
湯浅邦弘会員
- ・後任の評議員
伊藤徳也会員

◎事務局幹事の追加について

『学会便り』2022年第2号でお知らせした幹事2名（上原究一会員・遠藤星希会員）に加え、新たに市原靖久会員を2023年4月1日付で事務局幹事に委嘱することとなりました（任期は2023年4月1日から2025年3月31日まで）。

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関等の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄でも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

◎特別寄付金会計寄付者（20万円以上、歴代）

2021年度：加地伸行会員（300万円）

..... メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録いただいていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」よりご登録をお願いいたします。パスワードはsinology1234です。



訃報

『学会便り』2022年第2号発行以降、次の方のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。（敬称略）

| | |
|-------------|-------------|
| 松岡 俊裕（中部地区） | 2021年（日付不明） |
| 長谷部英一（関東地区） | 2022年11月24日 |

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便 便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

第75回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第75回大会は大阪大学が準備を担当し、本年10月7日（土）、8日（日）の両日、大阪大学豊中キャンパスにて開催することとなりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2023年4月吉日

日本中国学会第75回大会準備委員会

浅見 洋二

記

- 部 会 : 一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢学（漢文教育を含む）
四、歴史
五、パネルディスカッション
I 次世代シンポジウム
II 書評シンポジウム（応募方法等の詳細は『學會便り』本号22ページをご覧ください。）
- 時 間 : 一～四は発表20分に質疑応答10分、五は報告、質疑応答を含め全体で120分以内。
- 締 切 : 2023年6月26日（月）（当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします）
- 応募方法 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公開のものに限ります。一～四に応募される方は、氏名（フリガナ・所属研究機関および職位）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備委員会まで郵送すると同時に、それらの Word ファイル（.doc または .docx 形式）を E-mail（ファイル添付）により期日までに送付してください。E-mail 受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。五に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属研究機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備委員会宛てに送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。
※執筆者による校正はないため、完全原稿でお願いします。
- 応募資格 : 研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です。五の I 「次世代シンポジウム」については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新規入会の方は、応募申し込み締切日（6月26日）までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。
- 応募宛先・
問い合わせ先: 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学人文学研究科
浅見洋二研究室（日本中国学会第75回大会準備委員会事務局）
E-mail : japansinology75@gmail.com

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢学 四、歴史 五、パネルディスカッションの五部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。

◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。

◎常勤職を持たない会員が大会で発表を行い宿泊費を必要とされる場合は、補助金1万円を支給いたします。

◎学会ホームページを随時ご覧ください。

以上